

---

# Fate/resistance

弓塚 拓

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

F a t e / r e s i s t a n c e

### 【Nコード】

N 8 9 1 3 Y

### 【作者名】

弓塚 拓

### 【あらすじ】

杉内彩奈は異世界に迷い込み、理不尽なゲームに巻き込まれる！

注

F a t e の二次創作ですが、ストーリーや世界観が完全に崩壊しています。嫌な方はご注意ください。

## ブローグ

熱帯夜、私は目覚めた。

全身が汗で濡れている。

いつの間にかエアコンが切れていた。リモコンを探しだしエアコンをつける。

不愉快な服を脱ぎ捨て、下着になりシャワーを浴びに風呂場へ向かう。

女はボディーラインが綺麗だった。顔も整っていて、長い黒髪はすごく魅力的だ。

女は脱衣室で下着を脱ぎ風呂場へ。

女はシャワーの温度を少し下げ、ぬるま湯を頭から浴びた。

シャワーの音が音の無かった部屋に鳴り響く。頭と体を洗い終わると女はシャワーを止めた。

濡れたまま脱衣室に入り、かけてあったバスタオルをとり、体と頭をふく。

女からシャンプーのいい香りが漂っている。

ふき終わったバスタオルを洗濯機の中に入れ、脱衣室を出た。部屋はエアコンが効いて涼しかった。さっき脱ぎ捨てた服やビールの缶などで散らかっていたが、部屋は高級感を漂わせている。絨毯、絵画、ベッド、どれも高そうだ。

時計は三時丁度を指していた。

女は、ベッドに潜りこみ眠りについた。

ここはどこだろう。

杉内彩奈は気がつくと見知らぬ所で寝ていた。

“ 廃虚 ”

全面コンクリートで出来ている建物だ。人が住んでいる雰囲気がない。がらんどろ。

彩奈は起き上がり背中と尻を手ではらう。

自分は部屋で寝ていたはずだ。なぜここにいるのだろう。記憶を遡ってみるがなぜだかわからない。それに、服を着ている。自分の記憶の最後は裸であつたはず。黒いミニスカートに黒い服を着ている。私物ではない。

何が起きた？

何かの力を感じた。とてつもない大きなものを。

私はその力に吸い寄せられたのだ。なぜだかそう思った。

これからどうしよう？ 彩奈は辺りを見渡した。とりあえずここから出よう。

暗く薄気味悪いここから早く出たかった。

部屋を出ると階段がそこにあつた。コンクリートの階段はいびつに感じる。まがまがしいものがこの先にいるような妄想を掻き立てた。階段を降りていくと自分の足音が木霊する。

後ろから何かの気配がした。振り向くが誰も居ない。前に向き直り足を進める。

しばらく降りると出口が見えた。

何故だろう嫌な予感がする。

出口の前で予感が当たっていたことを知った。ここから見える全ての建物が廃虚だった。

全て古びた、全て人を感じない、見える全てが廃虚だ――

鈍色の雲に埋め尽くされた空がより一層、不気味さを増していた。

何だ、この世界は。

ここは私が住んでいた世界ではない。

彩奈の額に汗が浮かぶ。夢だろうか？ いや、夢にしてはリアルだ。焦りが出てきた。恐い。得体の知れない世界、もとの世界には戻れるのだろうか？

喉の乾きを感じた。

なぜ？ なぜ私が…

自分に振りかかっている出来事が怖くて堪らない。

彩奈は地面に座り込み震えた。

イヤだイヤだ―

頭を抱えてひたすら何かからの恐怖に堪えていた。これが夢である事を願った。恐怖の中にいるのはとても疲れることだった。

彩奈は一時間後には疲れはて眠りについた。

目を開けるとまだ空は鈍色だった。

今は何時だろう。癖で腕を見るが、腕時計は無かった。どれくらい寝たのかもわからない。

彩奈は立ち上がった。

腹がすいていて、何か口に入れたかった。

自然と恐怖は消えていた。慣れたのだろうか？ それとも、この世界の力の影響だろうか。

しばらく彩奈は歩き回った。誰かに会えるかもしれないという気持ちを持つているのだが、今のところは人を見ていない。歩き疲れると、廃虚の一つに入ってしまった。

どれくらいの距離を歩いたのだろうか。彩奈は地べたに座った。部屋には家具などが無かった。腹がなり始める。この世界には食料は無いのだろうか？

何もする事が無く、もと居た世界に思いを馳せた。

何故だろう、思い出せない。最後の場面は覚えているのに、どうしてもその後が思い出すことができない。

家族、友人、住所、全てが思い出せない。

ここにきて初めて涙がこぼれた。ショックな出来事が多すぎる。我慢がでなくなっていた。早く帰りたい。

しかし、もとの世界の記憶がない。帰れたら記憶は戻ってくるのだろうか、それとも、

先は考えたくなかった。何も考えたくない。  
腹が鳴る。

とりあえずは、食べ物を探そう。

この先を考えることを止めたかった。

廃虚は五階建てだった。部屋の数は全部で十五部屋、その内一階にキッチンがあった。

冷蔵庫の中を探ってみる。すると、食材が沢山あった。魚、野菜、冷凍食品、調味料、一般家庭の冷蔵庫の中のような量がある。

冷蔵庫もちゃんと機能している。食材は傷んでいないようだ。炊飯器、レンジ、クッキングヒーター、全ての物が機能した。

一週間は余裕で食に悩まなくて済む。

彩奈は卵焼きと簡単なサラダを作り、食べた。ご飯が欲しかったが早く食べたくて、炊いている時間が惜しかった。

お湯を沸かし、お茶を作った。

水道水も出だし、お茶のパックもあった。

米をとき、炊飯器にセットする。五時間後に炊き上がるようにした。いつでも食べられるように。

一息つき終わると廃虚の中を探索した。風呂、トイレ最低限生活に必要な物はあった。

キッチン以外の部屋は家具が置いていなかった。

彩奈は廃虚を出て隣の廃虚に入った。

キッチン、風呂、トイレ、全てあった。キッチン以外の部屋は家具が置いていない、冷蔵庫の中もまるごと一緒だ、違う所が無い。

気味が悪い。

その隣もまたその隣も全く同じだった。

初めの廃虚に戻って、炊飯器を見る、後四時間で炊き上がる。

一時間がたっていた。

彩奈は風呂にお湯をいれ、満杯になるまで待った。満杯になるとすべてを脱ぎ捨て風呂に飛び込んだ。久しぶりに風呂に入った気がする、時間がわからないからだろうか。

シャンプーと石鹸があつた。リンスがないのが残念だった。風呂は気持ちが良い。

髪を洗い、体を洗い、顔を洗う。換気扇が無いため風呂は湿りきっていた。

さっぱりした気持ちで風呂を上がると、眠たくなった。

ベッドが無いのため、床にバスタオルを敷いて寝た。眠りに落ちるのに時間はかからなかった。

彩奈は起きると、炊飯器からご飯をすくい茶碗へと、スクランブルエッグに味噌汁を作った。

ご飯を食べた。テレビ無での一人で食べる食事は寂しく感じた。

食べ終わると食器を流し台に運んだ。

廃虚を出てると相変わらずの空が広がっていた。

少し歩き回り、辺りを観察する。

似たような廃虚ばかりで視覚が狂いそうだ。

ふと、人の気配を感じた。辺りを見渡し、誰かいないか確かめる。

しかし、誰も居ない。人の気配はまだ感じる。

しばらく歩いて近くの廃虚に入った。

出口から外を見渡した。すると人影が見えた気がした。彩奈は廃虚から飛び出し人影が見えた方向に向かい走った。路地に入り、先を進む。人と話したい、その想いが強くなっていた。

ずっと走り続けた。

人の気配が強くなる。路地を抜けるとそこには、空き地のような空間があり人が十人位居た。皆、彩奈を凝視していた。人に出会えた喜びが沸き上がったが直ぐに鎮まった。

異様な雰囲気漂っている。

年老的な男性、若い男性、若い女性、老若男女それぞれだが、皆殺気を放っている。その中で殺気を全く感じない人がいた。小さな女の子だ。少女は地べたに座っている。

少女は黒髪のショートヘア、顔が整っていて、凛々しさを感じる。彩奈はその子に近寄り、声をかけた。

「こんにちは」

すると、殺気が強くなるのを感じた。皆、彩奈を凝視している。

「こんにちは」

少女から返事が返ってきた、それはとても落ち着いた声だった。

「ここでは何が起きてるの？ この世界は何なの？」

この少女が知っていそうにないが聞いてみた。

すると、少女はびっくりしたような顔をした。

「もうじきわかると思うよ」

何か知っていそうな口調だ。

「もうじきって？ 何か知っているの？」

急かすように聞いた。

「来る」

少女はそう呟いた。

「えっ」異様な雰囲気が強まった気がした。

「諸君、ごきげんよう」

彩奈は後ろを振り返る。すると、さっきまでいなかった大男がいた。ニヤニヤ笑っていて何かを楽しんでいるように見える。

「では、始めるとするか」

大男は言った。何を始めるのだろうか？

「さあ、並びましょう」

少女は彩奈に声をかけ大男の方に向かってている。

「ちょっと待って」

彩奈は少女を呼び止めるが少女は前に進む。

「ねえ、何が始まるの？」

彩奈は少女の真後ろにつき聞く。

「カードを引いて、サーヴァントを選ぶの」

「サーヴァント？」

サーヴァント、聞き覚えが無い。

「サーヴァントって？」

「簡単にいうと相棒よ」相棒、  
相棒を選ぶ？

大男は八枚のカードをババ抜きのように手で持っている。

少女が一番初めに引いた。その次が彩奈、次々とカードが引かれていく。一人一枚、最後の一人が引き終わると大男はニヤニヤ笑みを作った。

「では、九日間生き残ってくださいね」

大男は続けて、

「魔獣を放ちますよ」

と言い、大男は何かを呟き、手を上に上げた。

「今から、ここは何でもありの無法地帯です」

大男はそう告げると消えてしまった。

2XXX年八月二十日、自分の命をかけたゲームが今、幕を開けた

## 始まり

大男が目の前から霧のような靄になって姿を消した。彩奈は目の前で起きたことが信じられずにいた。この世界では普通の事だろうか？ 呆然としていると、強い殺気を感じた。

「ウオオオオオー」

響き割れそうな叫び。振り返るとそこには今まで見たなかで一番大きい男がいた。身長は二メートルを余裕で越えている。右手に大きい斧、左手には大きいサーベル。もはやそれは人間ではなかった。恐い。その大男が発するまがましい殺気が死を感じさせる。逃げよう。

しかし、足が動かない。死を目の前にしてなすすべがなかった。

大男は彩奈に歩みよつていく。目の前にもう大男はいた。

「はあっ、ひゅっ」

彩奈の息が荒くなった。

大男は斧を振り上げた。そして、振り下ろした。

雷のような物凄い音がした。

アスファルトの欠片と粉塵が舞う。

大男はアスファルトにのめり込んでいた斧を片手で引っこ抜き辺りを見渡す。仕留め損なった。

粉塵が風に飛ばされるとそこには大きな穴があいているだけで彩奈の姿はなかった。

「ちっ、逃したか」

大男の後ろにいた若い男が呟いた。

赤く染まった髪の毛が印象的な青年だ。

「まあいいか」

青年は口を歪め笑いをこらえているようだ。

「俺のサーヴァントは最強だ。なあ、バーサーカー」

大男は興奮している様子で今にも暴れだしそうだった。

彩奈は今までの出来事を信じられずにいた。

大男が斧を振り下ろしたのに、まだ生きている。

少女が助けてくれたのだ。一瞬で少女は彩奈を抱えて逃げたのだ。今も信じられない速さで少女は走っている。しばらく走り続けた後、少女はスピードを落としていく。

完全に止まると、少女は彩奈を下ろした。

「あつ、ありがとう」

「いいわよ、私はあの外道が嫌いなだけ」

外道とはさっきの男だろうか？

「私は好んで人殺しする奴らがすごく憎いの」

少女の顔は憎しみに満ちていた。

「そうだ、貴女魔術師じゃないでしょ」

魔術師？ 小説や漫画に出てくるやつだろうか？彩奈の返事を待たず少女は続けた。

「偶然かしら？ 必然かしら？ 貴女が巻き込まれたのは」少女は

何やら考えている。

「貴女は魔術師なの？」

彩奈は聞いてみた。

「ええ、私は魔術師よ」

少女は言った。

「魔術師はあまり正体をあかさないんだけどね本当は」

魔術師、今まで起こったとんでも現象は魔術師によるものだろうか？

「あの大男も魔術師なの？」

彩奈は聞いた。

「違うわ、あれはサーヴァントよ」

聞き覚えのある『サーヴァント』という言葉。

「サーヴァントってあのカード」

「そうよ、サーヴァントはあのカードを媒体に召喚されているの。サーヴァントはこの世界が選んだ、今は亡き戦士や悪党や英雄だね。そして、彼らはこの世界から出たいの。そのために私たちに協力しているのよ」

「カードを媒体に？」「そう、あのカードはサーヴァントをこの世界に呼び寄せるための媒体にすぎないわ。呼び寄せてしまえばカードは用済みよ」

「…」

彩奈は必死に理解しようとするが理解できない。

「サーヴァントはもともと違う世界に集められているのね、それであのカードを使ってこの世界に召喚しているの」

彩奈はなんとなく理解したつまり、カードはサーヴァントのいる世界とこの世界とをつなぐ扉なのだと。さらに、少女は話す。

「サーヴァントは皆がそうではないのだけど、自由になりたいの。

サーヴァントの世界では、サーヴァントは魂だけで肉体がないの」

彩奈は半分も理解できていないが相槌をうった。

「そして、この世界では仮の肉体を与えられる。肉体を得ることで自由になる、サーヴァントは主人と契約を交わし、主人を私たちの世界に返すことですよやく、本当の肉体を手に行けるってわけ」

「私たちが元の世界に？ どうしたら戻れるの？」

彩奈は元の世界に戻れることに驚いた。もうこの世界から出られないと思っていたからだ。

「九日間生き残れば良いのよ」

『生き残る』そういえば突然現れた大男も言っていた。それと、『魔獣』を放ったとも。

「生き残れって、魔獣から逃げろってことだよね。ところで魔獣ってなに？」

「魔獣というのは…、簡単にいうとライオンなどの獣が凶暴化して、さらにとてつもない身体能力をもったようなものかな」

ライオンから九日間逃げ切れそうもないのに、魔獣はさらにとてつ

もない身体能力を持っている。彩奈は力が抜け地べたにへたれ込んだ。死刑宣告されたように感じた。

「でも、貴女が私を助ける時に使った、あの…」

「無理よ、さつきは不意をついたから成功したけど、魔術師やサーヴァント、魔獣には効かないわ」

あの瞬間移動のようなのが効かないと知って彩奈はがっかりした。

「これまでに生き残って、もとの世界に帰れた人はいるの？」

「一人だけ」

『一人だけ』その言葉は彩奈をさらに苦しめた。何人中で一人なのかは聞きたくなかった。途方もない数が返ってきたらと考えると怖くて堪らなかったからだ。

「そこで提案なんだけど、共同戦線を張らない？ 生き残る確率を少しでも上げようと考えると、力を合わせて戦った方が良いと思うの。一緒に戦わない？」

この状況で仲間ができたことは彩奈にとって心強いことだった。

「ありがとう、一緒にもとの世界に帰ろ」

彩奈が二つ返事で返すと少女は微笑んだ。

「私の名前はね、桐島志穂。よろしくね」

少女は手を前に出し、握手を求めた。

「私は、杉内彩奈」彩奈は志穂の手を優しく握りしめた。

それから彩奈は、このゲームについて詳しいことを志穂から聞いた。このゲームではもとの世界に帰ることができたら、サーヴァントは本当の肉体を手に行き渡ることができることができ、魔術師たちは自分の願望がひとつ叶う。

自分のサーヴァントは他のサーヴァントの主人を殺すことで強くなる。

ほとんどのサーヴァントは、魔獣より身体能力が低い。（バーサーカーは例外で理性を失っている代わりに魔獣と同等の身体能力を持っている）

魔獣は何体いるかは不明。

サーヴァントのクラスは、セイバー、アーチャー、ランサー、ライダー、アサシン、キャスター、バーサーカーの全部で七つ。

だいたいのを聞き終わると日がすっかり沈んでいた。

彩奈と志穂は、廃虚の中に入り夕食を取ることにした。彩奈が料理を作り、志穂は食器を並べた。

四十分ほどで夕食ができた。それを二人で食べる。志穂は上品な食べ方をしていた。喋り方も大人びていた。厳しい教育を受けてきたのだろうか？

「スゴいね、話し方も大人っぽいし、食べ方も上品だし」

志穂は口の中にあるものを飲み込み、

「私の家は由緒正しい、魔術師の血筋なの、それで桐島家の一人として恥ずかしく無いようにって、教育を受けてきたから」と言った。そう言った志穂はどこかほこらしげだった。

夕食を食べ終わると、志穂はサーヴァントの召喚をると言い二階の部屋に付いてこいと言った。

志穂はポケットからカードを取り出すと呪文を唱える。それはこの国の言葉かわからないものだった。

すると、カードが光だし辺りを包み込んだ。

光が消えると、そこには甲冑を着た女の子がいた。その少女は高校に通う彩奈とだいたい同じ歳に見える。少女は茶髪で鼻はすっと高く整っていて、顔立ちが凛々しかった。

「召喚に応じ参上した。問おう、貴女が私のマスターか」

甲冑を着た少女は志穂に向かい合い言った。

「ええそうよ」

志穂は言い終わると、彩奈の方を向いた。

「召喚にはいろいろな方法があるの。貴女には感じて召喚する方法が良いかしら」

「感じる？ 何を感じたらいいの？」

「向こう側にいるサーヴァントよ。まあ時間がかかってるでしょうけど、根気よくやると良いわ」

と言っ終わると、光が辺りを包み込んだ。

「うそ、できた」

彩奈は驚いていた。志穂も同じに驚いていた。

「問おう、あんたが俺の主人か」

召喚されたのは、日本刀を二つ携えた少年だった。

## 始まり（後書き）

### 注意

2XXX年ということで本作にでてくるサーヴァントは、今（2011年）より未来の英雄や戦士が多いです！

架空の人物です！

実際にいた、英雄ではありません。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8913y/>

---

Fate/resistance

2011年12月3日21時00分発行